

79

## 西忍『藪明集』における 田代三喜と曲直瀬道三の能毒書の影響について

鈴木 達彦<sup>1,2,3)</sup>, 平崎 能郎<sup>3,4)</sup>, 並木 隆雄<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 帝京平成大学薬学部, <sup>2)</sup> 北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部,

<sup>3)</sup> 千葉大学大学院医学研究科和漢診療学, <sup>4)</sup> 千葉大学医学部附属病院プレストセンター

西忍は田代三喜と曲直瀬道三に師事したとされており、田代三喜から曲直瀬流の医学の流れを解明する上で無視することのできない人物であるが、これまで本格的な研究はなされていない。西忍の代表的な医書とされる『藪明集』の「西忍伝」には兩名に師事したとあるが、この点についても疑問が残る。本研究では『藪明集』の原書に近いとみられる大阪府立中之島図書館石崎文庫に所蔵される『藪明集』(692/197)を中心として、三喜と道三の能毒書との関係を検討した。

西忍の『藪明集』には、森田元貞らが関わった寛政6年の刊本があり、京都大学富士川文庫など諸所に所蔵されている。それとは別に石崎文庫所蔵の写本資料は内容が大きく異なる。全体的には『捷徑弁治集』や『和極集』、『出証配劑』、『授蒙聖功方』など三喜や道三関係の医書が多量に引用されている。道三の薬物書である能毒書に関係する部分も見受けられるが、写本と刊本では内容が異なる。その他の西忍の関連書などを調査したところ、能毒の記載は大きく分けて2つに大別されることが推察された。

写本系では、石崎文庫の『藪明集』では巻二に「薬剤治証捷要部」として能毒に関する部分がある。内容は道三の初期能毒書を基本とし、独自に増補したとみられる部分がある。生薬の記載順序は、香附子が1番初めで、陳皮、芍薬と続いており、道三の初期能毒書のいずれの系統とも異なる配列である。文章は仮名交じりの文体となっているが、道三の仮名能毒系とは異なる仮名の振り方をしており、演者らが明らかにした曲直瀬流の初期能毒書の系統でいえば、仮名能毒系か注能毒系かいずれの系統の能毒書をもとにしているかは明らかでない。写本の『藪明集』の能毒と同系列の内容を持つものには、富士川文庫所蔵『西忍記』(サ/5)がある。ここには「能毒集」として記載されており、独自の増補が少なく、より道三の初期能毒書に近似している。

刊本の『藪明集』では巻之三に「薬剤治証捷要」として能毒部分がある。写本系の能毒と異なるところは、道三の能毒書に由来するとみられる部分がかなり少なくなっているところである。また、生薬の記載順序も異なり、心部、肝部、肺部、脾部、腎命部、附蟲部と五臓により生薬を分類している。田代三喜の『当流能毒集』でも五臓による区分をしているが、各々の区分に配当される生薬が異なることから、直接的な関係性は認められないと考えられる。西忍の写本系の能毒と同系列のものを収載する資料には、『西忍流上下巻』(内藤記念くすり博物館31543)、および『西忍流家方』(高知県立図書館山内文庫ヤ494-30(1))、『西忍流正伝』(京大富士川文庫サ/6)などがある。これらの資料では五臓をもとにした分類はさらに細かく、心浮強、心舉按共弱、肝浮強、肝弱、腎強、腎弱、肺強、肺弱、脾強、脾弱、命門強、命門弱などの分類をしている。また、内藤『西忍流上下巻』と富士川『西忍流正伝』では、上記に加えて生薬各々に引経報使に関する記述がある。曲直瀬流の能毒書のなかでも、長澤道寿の『増補能毒』においては引経報使の記述があるが、両者の引経報使の内容は一致していない。

以上から、西忍の能毒には写本系と刊本系の2系統が認められ、写本系の方がより道三の能毒書の影響が強いとみられ、刊本系の能毒の方は引経報使など独自の視点から論じているところが多く、また、三喜の分類との関係性は不明ながら、道三の能毒にはみられない五臓の分類を行っている。写本の『藪明集』が原本に近く、初期の西忍の能毒を記載していると仮定すれば、西忍の薬物理論は、道三の能毒書の影響が強い段階から、引経報使や五臓の分類など自身の見解を加えていったと推し量ることができる。

本研究は武田科学振興財団杏雨書屋研究助成の成果の一部である。